論文の内容の要旨

「展示不可能なもの」の展示
カール・ヴィートのアジア美術研究における美術史学と人類学

東京大学総合文化研究科　超域文化科学専攻
比較文学比較文化分野

安永 麻里絵

本論文は、ドイツの美術史家カール・ヴィート（Karl Eberhard With, Bremerhaven, Jun. 22, 1891 - Los Angeles, Dec. 18, 1980）が1910 年代から1920 年代初頭にかけて取り組んだアジア美術研究を対象とし、その美術史学的方法論と美術館展示における実践の特質を分析し考察しようとするものである。19 世紀後半のヨーロッパでは、非西欧文化圏の文化遺産に対する関心が高まり、はじめ考古学や民族学の資料として盛んにこれらの発掘調査や研究が進められていた。一方で、アジアのなかでもとくに日本の美術工芸については、フランスに端を発するジャポニスムの流行を受け、アジアの文物に美的価値を見出す素地が準備されていた。そうしたなか、20 世紀初頭に入ると、本来西洋美術の概念体系に含まれないこれらのアジアの文物を「美術作品」として積極的に評価しようとする動きが一部の美術史家や蒐集家のなかで起き始めていた。カール・ヴィートは、このような時期にアジアの美術に関心を持ち、ドイツ語圏で最初に東洋美術を研究できる学科を設置したウィーン大学美術史研究所に入り、当研究所の創設者であるヨゼフ・シュトスゴフスキー（Josef Strzygowski, 1862-1941）の最初の門下生として、日本の仏教美術の研究に取り組んだ。1913 年には来日して半年間奈良で調査を行い、その結果を『日本の仏教彫刻』（1918）にまとめた。さらに、新進気鋭のアジア美術史家として、1920 年には『ジャワ』『バリ』を発表している。これらのアジア美術研究はヴィートにとって、西洋とは異なる文化にお

ける美的な造形物の美術的価値をどのように判断・記述し、また提示すべきか、という問題を考察する過程で、西洋における「美術」や「美術作品」の概念を相対化していくことになる。そのなかでヴィートは、西洋美術史の価値体系における「美術」の概念を、アジアの美術に安易に適用することの矛盾に気づき、アジア美術の固有性を認めた上でそれらを美術として語り考察することはいかに可能か、という問題に取り組む。とりわけヴィートにとって重要な問題だったのは、単にアジアの美術について分析したり記述したりするにとどまらず、それらの美術自体を西欧観衆に向けていかに提示することができるか、ということだった。西洋の絵画や彫刻は「展示」されることが当然の前提とされるが、そのような「美術作品」としてそもそも作られていないアジアの文物は、本来展示されることを前提としていない「展示不可能なもの」である。すなわちヴィートのアジア美術との取り組みは、「展示不可能なもの」をいかに展示するか、という問題をめぐる試行錯誤だった。本論文ではその過程を跡付け、ヴィートが、美術史的な方法論に軸を起きながらも、考古学や民族学など隣接諸領域の方法論に接近したり離反したりしたあとで、黎明期の文化人類学的視点を取り入れていったことを明らかにしたい。これらの思考の変遷のひとつの集大成として、1923 年に行った仏像展示では、美術館空間において美術史学的視点と文化人類学的視点を接合することを試みている。

第１章では、青年期のヴィートと、ドイツのフォルクヴァング美術館の創設者であるカール・エルンスト・オストハウス（Karl Ernst Osthaus, 1874-1921）との交友を跡付けることを通じて、ヴィートがはじめ西欧の近代美術に関心を持つようになった経緯について考察する。ドイツ国内の他の美術館に先んじて西欧近代美術と非西欧美術の両方を収集・展示していたフォルクヴァング美術館のハイブリッドな展示空間は、ヴィートに美術館展示のひとつのモデルを提示した。

第２章では、ヴィートの美術史家としてのもうひとつの原点である非西欧とりわけアジアの美術に対する関心の萌芽と、彼の日本体験の実態に迫る。1911年にボロブドゥール遺跡の写真に魅せられたことをきっかけにアジアの美術への関心を強めたヴィートは、1913 年から1914 年にかけて日本を訪れ、現地の仏教彫刻の調査に取り組んだ。ヴィートが日本で具体的にどのような体験をし、またどのような人々と交友を持ったのかを跡づけ、ヴィートが美術史家として自己形成を行っていく上でそれらの日本体験がどのような意義をもったかを考察する。

第３章では、ヴィートの最初の著書である『８世紀までの日本の仏教彫刻』（1919）について論じる。ヴィートは日本で実見した仏教彫刻についてまず様式分析の手法を援用して歴史的に論じようと試み、そのために写真資料を活用した。彼の様式論の叙述の仕方と仏

像写真の分析を通して、ヴィートがこれらの仏教彫刻に向けた美術史家としての視点はどのようなものだったのかを分析する。
第４章と第５章では、1920 年代にヴィートが創刊した叢書《アジアの精神、芸術と生活》から刊行された『ジャワ』と『バリ』の二冊をそれぞれ検討する。『ジャワ』を通じてヴィートが、オランダにおける植民地研究として生成・展開したインドネシア学の研究者たちと交流し、インドネシア考古学に接近したことを示す。一方、ドイツ人医師グレゴール・クラウゼのバリ写真を集めた『バリ』は、ヴィートにとっては西欧近代の芸術概念を相対化するための場となったが、その一方で、窃視的な性質を持つクラウゼの写真がはらむ植民地支配の矛盾もまた明らかになった。こうした取り組みを経て美術史学、あるいは植民地研究としての考古学や人類学それぞれの限界や問題点を相対化したヴィートは、1920 年代のオランダで起こりつつあった一般学問としての文化人類学にヒントを得て、「展示不可能なもの」を展示するためのひとつの方策として美術史的視点と文化人類学的視点を接合するという発想を得た。
第６章では、ヴィートのこのような着想が体現された、1923 年のヴィートによる仏教彫刻展示を分析する。